

# 預言の霊——真夜中の叫び

## ハバククの二つの板

Jeff Pippenger

2012-10-13

### 明確化のための言葉

最近、私たちは、当ウェブサイトに掲載されている諸言語へ翻訳するために、『ハバククの二つの板』の書き起こしの準備を開始した。口頭の発表を文書による発表へと変える作業は、口頭の発表を文書による発表へと仕上げるために越えなければならない数々の障害に加え、最終的にその資料をウェブサイト上の諸言語へ翻訳する際に伴う不可避の問題に通じていない者には理解されにくいほど、はるかに大きな作業である。私たちは九十五回の発表のうち最初の一回のコピー編集を始めたばかりであるが、その際、私たちがさらに越えなければならない別の障害を見いだした。それは、一九八九年から私たちの現在の歴史に至るまでの、このメッセージの漸進的な発展に関わることである。

およそ十五年前の発表においては、ある真理が理解の幼年期にあった。そのうち、私がいままで明らかにしなければならない最初の真理は、ミラー派の歴史における第二天使の到来である。私は当時、第二天使は、プロテスタント諸教会がミラーによる第一天使の使命の提示に対してその門戸を閉ざし始めた時、すなわち一八四三年の終結と関連して到来したと理解していた。ウィリアム・ミラーは、一八四三年が一八四三年三月二十二日に始まり、一八四四年三月二十二日に終わることを示していると彼が信じた時間計算に基づいて働いていた。彼は、最終的に二つの聖なる図表の上に掲げられることになった三つの預言が一八四三年のうちに終結すると考えており、またその年は一八四四年三月二十二日に終わると信じていた。彼は二つの点において誤っていた。

ダニエル十二章の千三百三十五日に関する三つの預言、レビ記二十六章の「七つの時」の二千五百二十年、およびダニエル八章の二千三百日の預言は、ミラーによって一八四四年三月に終結すると理解されていた。その後、主はサミュエル・スノーを導き、それらの預言が一八四三年ではなく一八四四年に終わることを理解させただけでなく、スノーはまたカライ派の時の計算法を適用し始めたが、それはミラーが用いていた時の適用法ではなかった。ミラーは、春から春へと年を定める、ラビ的・春分基準の時の計算法を用いていた。

私たちがハバククの二つの板を提示していたとき、私たちはこの歴史的現実を理解しておらず、第二の到来と遅延の時の始まりを1844年3月22日と画するために、ミラーの経験を用いていた。私は、その天使の到来が、プロテスタントが第一天使についてのミラーのメッセージを拒絶した時に対応していたことを理解していたし、今もなおそう理解している。そして、次の一節が私の投げ所であった。

「1842年6月、ミラー氏はポートランドのカスコ街教会において、その第二回講演会を行った。私はこの講演会に出席できることを大いなる特権と感じた。というのは、私は落胆の中にあり、自分の救い主にお会いする備えができていたとは感じられなかつ

たからである。この第二回の講演会は、第一回のものよりも、はるかに大きな反響を市内に引き起こした。ごく少数の例外を除いて、諸教派はそれぞれの教会の扉をミラー氏に対して閉ざした。さまざまな講壇からなされた多くの説教は、この講演者のいわゆる熱狂的誤謬を暴こうとした。しかし、切実な思いを抱く聴衆の群れが彼の集会に出席し、多くの者は会場に入ることすらできなかった。会衆は異例なほど静粛で、よく耳を傾けていた。」『ライフ・スケッチズ』27頁。

私は、ミラーの使命に対して扉が閉ざされたことが第一天使の拒絶の始まりを画したものと理解しており、また、時の計算についてのラビ的／春分基準の算定法に関するミラーの理解に従って、1844年3月22日が1843年の終結を示すものと想定していた。1842年6月にポートランドでなされたミラーの提示は、実際には、最終的に1844年4月18日に結末を迎えた漸進的な拒絶を特定する一つの道標であるが、その提示がなされた当時、私たちは、時の計算に対するサミュエル・スノウのカライ派の算定法の適用をまだ認識していなかった。

最初の発表を校閲し始めたとき、私は、その時に記録された内容が、私たちが今教えていることと矛盾しているように思われるのを見だし始めた。それは、矛盾しているとも言えるし、していないとも言える。これは単に、第二天使の漸進的到来に重点を置いたものであり、また、ミラー派の歴史においてもそうであったように、このメッセージが漸進的に開封されていくことの一つの例証でもある。この注記による明確化は、1844年4月19日を最初のミラー派の失望として私たちが位置づけていること、ならびに過去に教えられていた事柄につまずいた人々に対処するものとなるはずである。

「第一および第二の使命は1843年と1844年に与えられ、私たちは今、第三の使命の宣布のもとにいる。しかし、この三つの使命は、いずれもなお宣布されるべきものである。それらが真理を求めている人々に繰り返し告げられることは、今もこれまでと全く同様に不可欠である。私たちは、筆と声によってその宣布を響かせ、その順序と、私たちが第三天使の使命へと導く預言の適用とを示さなければならない。第一と第二なしには、第三はあり得ない。これらの使命を、すでにあつた事柄とこれから起こる事柄とを預言の歴史の流れの中に示しつつ、出版物によって、また講演によって、世に伝えるべきである。」『Selected Messages』第2巻、104。

## ハバククの二つの板 1/95

### ハバククの二つの表と真夜中の叫びへの序論

この連続講義において、私たちはハバククの二つの表——1843年図表と1850年図表——を、長期にわたって考察していく。まず、真夜中の叫びを所定の位置に据えることから始める。すでに述べたように、初回の提示内容の多くは、このメッセージに親しんでいる人々にとっては復習となるであろう。しかし、このメッセージに新しく触れる人々によっても学ばれ得る一連の講義を準備している以上、彼らのためにいくつかの基本的な考えを提示しなければならない。私たちは真夜中の叫びから始め、エレン・ホワイトの最初の幻の中に見いだされる一つの側面に焦点を当てる。それでは、『Christian Experience and Teachings』57ページの第一段落を読もう。

1844年に時が過ぎて間もなく、わたしに最初の公の幻が与えられた。わたしはメイン州ポートランドで、キリストにある愛する姉妹ヘインズ夫人を訪ねていたが、その心はわたしの心と固く結ばれていた。わたしたち五人は、皆女性であり、家庭祭壇の前に静かにひざまずいていた。わたしたちが祈っていると、これまでに経験したことのないほど神の力がわたしに臨んだ。

シスター・ホワイトと心をつにしていたこの五人の女性たちは、神の力のいかなる現れにも反対してはいなかった。注目すべきことに、彼女たちは皆女性であり、教会を表しており、しかも五人であった。これは五人の賢い乙女と見ることができる。これは単なる観察である。

私は、光に取り囲まれ、地上からますます高く引き上げられているように思われた。私はこの世にいる再臨信徒たちを見ようとして振り向いたが、彼らを見いだすことができなかった。そのとき、ある声が私に「もう一度見なさい。そして少し高いところを見なさい」と言った。そこで私は目を上げ、まっすぐで狭い道が、この世界のはるか上方に高く設けられているのを見た。この道の上を、再臨信徒たちが、その道の果てにある都へと進んでいた。彼らの後方、この道の初めには、明るい光が掲げられており、御使いはそれが真夜中の叫びであると私に告げた。この光は道の全体を照らし、彼らがつまずかないようにその足もとを照らしていた。彼らが、自分たちのすぐ前におられて都へ導いておられるイエスから目を離さないでいるかぎり、彼らは安全であった。だが、まもなく疲れを覚える者たちが現れ、都はまだはるか遠くにあり、もっと前にそこへ入っているはずだったのに、と言った。するとイエスは、その栄光に満ちた右の御腕を上げることによって彼らを励まされた。その御腕から一つの光が発し、再臨の一団の上を波のようにめぐると、彼らは「ハレルヤ！」と叫んだ。ほかの者たちは軽率にも自分たちの後方の光を否み、彼らをここまで導き出したのは神ではなかったと言った。すると彼らの後方の光は消え失せ、彼らの足もとは全き暗闇となり、彼らがつまずき、目標とイエスを見失って、道から落ち、下の暗く邪悪なこの世の中へと落下した。

## ウィリアム・ミラーと真夜中の叫び

この最初の提示においては、いくつかの点を確立したのち、1844年12月のロー・ハンプトンにおけるアドベンチストの会議について論じる。この会議では、幾人かのミラー派の人々が集まり、ウィリアム・ミラーは真夜中の叫びの理解を退けた。ここにおける論理は、この幻は私たちすべてのためのものであるとはいえ、とりわけウィリアム・ミラーのためのものであった、ということである。

まさにその同じ月に、ウィリアム・ミラーは、自分たちの背後を照らしていた光——真夜中の叫び——を否認したが、そのことは彼を下の邪悪な世界へと至る道から踏み外させることになる。私たちはこのことの含意を探究するであろう。歴史的証拠は、ミラー派の人々が皆、自分たちは十人のおとめのたとえを成就していると信じていたことを示している。それは彼らの間では周知の事実であった。私たちは、ウィリアム・ミラーが真夜中の叫びとは何であるかについて理解を有していたことを示すであろう。ミラーは、真夜中の叫びとはダニエル8:14および黙示録14:6-9の審判の時の使命であると信じていた。彼は、1830年代初頭に自らが宣べ伝え始めた使命こそ、「見よ、花婿が来る」という真夜

中の叫びであり、イエスが花婿としてこの世に来られるのだと信じていた。

ミラー派の歴史の大部分において、彼らは自分たちが十人のおとめのたとえを成就していると信じていたが、真夜中の叫びは自分たちが宣べ伝えてきたメッセージを指していると考えていた。ところが、1844年の夏までに、新たな、しかも正しい理解が現れた。すなわち、真夜中の叫びとは第七月運動であり、イエスは第七月の十日に来临されると期待されていたのである。それが真の真夜中の叫びであった。1844年12月にミラーがこの真の真夜中の叫びを拒絶したとき、彼は1844年夏の歴史を拒絶し、それが1830年代以来の単なる一般的なメッセージにすぎないとする以前の立場へと立ち返っていたのである。真夜中の叫びの力学を理解することは極めて重要である。もし2520をミラー派が理解したように理解しないなら、あなたは真夜中の叫びを理解することができない。もし真夜中の叫びをミラー派が理解したように理解できないなら、あなたは下方の邪悪な世へと至る道から落ちるのである。

この発表では、まず、今日のアドベンチズムによって公然と退けられている図表上のいくつかの真理から始める。セブンスデー・アドベンチスト教会の聖書研究所と、大多数のアドベンチスト神学者たちは、2520を退けている。これについては、進める中で聖書的に扱うが、まず最初に、エレン・ホワイトが2520を全面的に支持していることを示す。研究所と大多数の神学者たちはまた、日ごとのことに関する開拓者たちの理解をも退けている。日ごとのことが異教であるという開拓者たちの理解を退けることは、預言の霊を退けることであることを、私たちは示す。研究所はまた、ラッパに関する開拓者たちの理解——第五のラッパと第六のラッパ——を公に退けている。私たちはまず、ラッパに関する開拓者たちの理解を退けることが、預言の霊を退けることであることを示す。

今日、ほとんどのアドベンチストは、1290と1335について、よく言っても曖昧である。1335に関する先駆者たちの理解がなければ、1844年3月22日に始まった遅延の時を特定することについて、聖書的な正当性は存在しない。遅延の時を理解しなければ、真夜中の叫びの力学を把握することはできない。真夜中の叫びを理解しなければ、人は下なる悪しき世へと通じる道から落ちてしまう。私たちはこれらの真理を、預言の霊の明白な是認という観点から図表の上に示し、その後、神の御言葉によってそれらを詳細に吟味する。しかしその前に、ミラー派の歴史を取り巻いていたものは何であったのか、そして何が真夜中の叫びを生み出したのかを見なければならぬ。

## ミラー派の歴史と第一天使の到来

ミラー派の歴史を示し、1798年に言及するために、521ページの『Thoughts on Daniel and Revelation』にあるウライア・スミスから始める。ウライア・スミスは次のように記している。「黙示録第10章の出来事の年代は、この御使いが黙示録第14章の第一の御使いと同一であるという事実によって、さらに確証される。」黙示録第10章では、力あるひとりの御使いが、開かれた小さな巻物を手にして天から下って来る。エレン・ホワイトは、この力ある御使いはイエス・キリストであり、その小さな巻物はダニエル書であると告げている。第10章の終わりまでに、ヨハネはその小さな巻物を食べるように命じられ、それは彼の口には甘い、腹には苦いものとなる。ヨハネはミラー派の歴史を表しており、そこではダニエルのメッセージは甘い、苦い失望へと至る。開拓者たちによれば、黙示

録第10章の力ある御使いは黙示録第14章の第一の御使いであり、すなわち両者は同一の御使いである。

私たちはしばしば、黙示録におけるこれらの御使いについて、あまり詳しく時間をかけて特定しないが、そうすべきである。黙示録10章の力強い御使いはまた、ウィリアム・ミラーが、黙示録14章の第一の御使いの働き—「神を恐れ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである」—を成し遂げることによって真夜中の叫びを成就していると感じた、その御使いでもある。「神のさばきの時」とは、ダニエル8:14を指している。これらの御使いは、成し遂げられた働きのさまざまな側面を示している。

ウリヤ・スミスに戻ろう。「黙示録第10章の諸事件の年代順は、この御使いが黙示録第14章の第一の御使いと同一であるという事実によって、さらに確証される。」彼は、何がそれらを結び付けているのかを説明している。すなわち、両者はともに宣布すべき特別の使命を有し、ともに大声でその宣布を発し、ともに創造主に言及する類似の言葉を用い、またともに時に関して宣言するのである。一方は、もはや時がないことを誓い、他方は、神の審判の時が来たことを宣べる。黙示録14章6節の使命は、終わりの時の開始よりこちら側に位置している。

ウライア・スミスは、終わりの時は1798年であり、黙示録14章の使命はその後に来ると述べている。彼はこう記している。「しかし、黙示録14章6節の使命は、終わりの時の開始より後の側に位置している。それは神の審判の時が来たことの宣布であり、したがって、その適用は最後の世代になされなければならない。パウロは、審判の時が来たとは宣べ伝えなかった。ルターとその同労者たちも、それを宣べ伝えなかった。パウロは、来たるべき審判について、それが不定の将来に属するものとして論じ、ルターはそれを少なくとも自分の時代から三百年先に置いた。さらに、パウロは、ある時に至るまでは、神の審判の時が来たというこのような宣教に対して教会に警告を与えている。」テサロニケ第二2:1-3において、パウロは、まず背教が起こり、不法の人が現れるまでは、キリストの日は近づいていないと述べている。パウロは、不法の人、小さい角、教皇制を提示し、その至上権の全期間を警告によって覆っているが、その期間は1260年続き、1798年に終わった。

1798年に、キリストの日が近いことを宣べ伝えることに対する制限は終わった。終わりの時が始まり、小さな巻物から封印が取り去られた。それ以来、黙示録14章の御使いは進み出てきた。ウライア・スミスは、「もしあなたがそれを見るなら、1798年以来、第一天使の使命は進み出てきたのである」と述べている。1798年に、黙示録14章の第一天使が歴史の中に到来する——これが先駆者たちの理解である。それ以来、黙示録14章の御使いは、神のさばきの時が来たことを宣言し、また10章の御使いは海と地の上に立ち、もはや時がないことを誓った。彼らが同一であることは疑う余地がない。一方を位置づけるすべての論証は、他方にもそのまま有効である。現代の世代は、これら二つの預言の成就を目撃している。再臨の宣教において、とりわけ1840年から1844年にかけて、それらの完全かつ詳細な成就が始まった。

スミスは、黙示録14章の第一の天使が1798年に到来したことに関連して1840年と1844年を示しているが、同時に、その使命が力を与えられる1840年にも第一の天使を位置づけ

ている。再臨の宣教において、とりわけ1840年から1844年にかけて、その完全な成就が始まった。海に一つの足を置き、地に一つの足を置く天使の姿勢は、その宣言の広範な及ぶ範囲を示している。その使命は大洋を越えて諸国民へと広がることになっており、実際に再臨の宣布は世界のあらゆる宣教地にまで到達した。1840年以降、第一の天使の使命は、エレン・ホワイトによれば、世界のすべての宣教地へと携えられた。これは、オスマン帝国の崩壊によって聖書預言の一年一日原則が確証されたときに成就した。ここで私たちが扱っているのはその詳細ではなく、ミラー派の歴史と真夜中の叫びの力学のための舞台を整えることである。

### 主要な歴史的出来事：1833年と星々の落下

1833年に、星の落下が起こった。エレン・ホワイトは『各時代の争闘』333ページで次のように述べている。『1833年、すなわちミラーがキリストの近い再臨の証拠を公に提示し始めてから二年後に、救い主がその再臨のしるしとして約束された徴の最後のものが現れた。イエスは、「星は天から落ちるであろう」と言われた（マタイ24:29）。またヨハネは黙示録の中で、神の日を告げ知らせる光景を幻のうちに見て、次のように宣言した。「天の星は地に落ちた。それは、いちじくの木が大風に揺すぶられて、青い実を落とすようであった」（黙示録6:13）。この預言は、1833年11月13日の大流星雨において、著しく感銘深い成就を見た。』

ウィリアム・ミラーの証言は次のように述べている。『1833年の夏、ある土曜日の朝食後、私はある論点を吟味するために机に向かって座っていたが、外へ出て仕事に取りかかろうとして立ち上がったその時、「行って、それを世に告げよ」との思いが、かつてないほどの力をもって私の心に迫ってきた。その印象はあまりにも突然で、しかも強烈であったため、私は椅子に崩れ込むように腰を下ろして、「主よ、私は行けません」と言った。「なぜ行けないのか」との応答があるように思われ、すると私のあらゆる弁解、すなわち自分には能力がないという思いが次々に湧き上がってきた。だが苦悩は非常に深くなり、私は、もし神が道を開いてくださるなら、行って世に対する自分の務めを果たします、と神と厳粛な契約を結んだ。「道を開くとはどういうことか」との思いが私に臨んだ。そこで私は言った。もしどこかで公に語るよう招きを受けるなら、私は行って、主の来臨について聖書の中に見いだしたことを人々に告げよう、と。その瞬間、私の重荷はすべて消え去った。そして、私はおそらくそのように求められることはあるまいと喜んだ。というのも、私はそのような招きを受けたことがなく、自分の苦闘は知られておらず、どこかの働き場に招かれる望みもほとんど持っていなかったからである。その時から約三十分後、まだ部屋を出ないうちに、私の住まいからおよそ十六マイル離れたドレスデンのギルフォード氏の息子が入って来て、父が私を呼んでおり、一緒に家へ来てほしいと言っていると告げた。私は、何の用かと尋ねた。すると彼は、翌日彼らの教会では説教がないことになっており、父は私に来てもらって、主の来臨という主題について人々に話してほしいと願っているのだと答えた。私は、自分があの契約をしたことをたちまち悔いて腹立たしく思った。私は直ちに主に逆らい、行くまいと決心した。私はその少年に何の返答も与えないままその場を離れ、ひどい苦悩のうちに近くの林へ退いた。そこで私は約一時間、主と格闘し、自分が主と結んだ契約から解かれようと努めたが、少しも安らぎを得ることができなかった。「あなたは神と契約を結びながら、そんなにも早くそれを破

ろうとするのか」との思いが私の良心に強く迫り、そのようなことをすることの甚だしい罪深さに私は圧倒された。ついに私は服し、もし主が私を支えてくださるなら行きます、そして、主が私に求められるすべてを果たすための恵みと力を与えてくださることを信頼します、と約束した。私は家に戻ると、その少年がまだ待っているのを見いだした。彼は昼食後までとどまり、私は彼とともにドレスデンへ戻った。』このようにしてミラーは、1833年の夏、公にこの使命を提示し始めた。1833年12月、星の落下は彼の使命にいつもの厳粛さを加えた。

## 1840年：預言の成就とオスマン帝国

1840年において、エレン・ホワイトは預言の著しい成就について論じている。この一節は『預言の霊』の中でしばしば論争の的となり、ユライア・スミスがこれを『各時代の大争闘』に挿入したと主張する者もいるが、そのような議論には根拠がない。彼女は、星の落下や暗黒日を含め、1840年に至るまでの預言成就の連続について語っている。彼女はこう記している。「1840年には、預言のもう一つの著しい成就が広範な関心を引き起こした。」

彼女が言及しているのは、ジョサイア・リッチによる単なる人間的予測ではなく、聖書の預言である。その二年前、再臨を宣べ伝えていた指導的牧師ジョサイア・リッチは、黙示録第9章の注解を出版し、オスマン帝国の滅亡を予告した。彼の計算によれば、この勢力は1840年8月11日に打倒されるはずであった。指定された時に、トルコはその使節を通してヨーロッパ列強の保護を受け入れ、それによって自らをキリスト教諸国の支配下に置いた。この出来事は、その予告を正確に成就した。これが知られると、多くの人々は、ミラーとその同労者たちが採用していた預言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みが与えられた。学識と社会的地位のある人々がミラーと結びついて彼の見解を説教し出版し、1840年から1844年にかけて、その働きは急速に拡大した。

ウライア・スミスは、黙示録14章の第一天使は1798年に到来したと私たちに語ったが、それは黙示録10章の天使と同じ天使である。黙示録10章において、ヨハネはその天使の手から小さな巻物を取って食べるよう命じられ、それは彼の口には甘くなるであろうと告げられる。ミラー派のメッセージは、聖書預言の一年一日原則に基づいてオスマン帝国の崩壊を二年間にわたり予告した後、1840年8月11日に甘いものとなった。その出来事が正確に成就したとき、彼らが宣べ伝えていたメッセージは彼らの口に甘いものとなった。

1840年8月11日、そのメッセージは彼らの口に甘いものとなった。ヨハネは、降って来た御使いの手からその小さな巻物を取るよう命じられている。御使いが降るのは1840年8月11日であり、この黙示録10章の御使いは、黙示録14章の第一の御使いと同一である。黙示録14章の御使いは、終わりの時である1798年に到来するが、そのメッセージは1840年に力を与えられる。エレン・ホワイトは、その出来事が知られるようになったとき、群衆はミラーとその同労者たちが採用した預言解釈の原則の正しさを確信したと述べている。1930年代以来、1919年に始まり、とりわけ1930年代において、アドベンチズムは、ミラーとその同労者たちが採用した預言解釈の規則——すなわち、聖書研究におけるブルーフ・テキスト方式——を退けてきた。

## 1843年の図表と遅延の時期

歴史における次の道標は、1842年5月に作成された1843年の図表である。エレン・ホワイトは次のように述べている。『わたしは、1843年の図表が主の御手によって導かれたこと、そしてそれは変更されるべきではなく、その数字は主が望まれたとおりであり、また主の御手がある上であって、いくつかの数字における誤りを隠されたため、主の御手が取り去られるまでは、だれもそれを見ることができなかったのを見た。』この図表は、1842年5月に作成された預言的道標である。1842年6月、プロテスタント諸教会はその門戸を閉ざし、第二天使が到来する。

『証言集』第一巻、21ページより。「1842年6月、ミラー氏はメイン州ポートランドのカスコ街路教会において、第二回目の講演会を行った。ごく少数の例外を除いて、諸教派はその教会の扉をミラー氏に対して閉ざした。」エレン・ホワイトは、セブンスデー・アドベンチストのクリスチャンとして、私たちは原因から結果へと論じることを学ぶべきであると告げている。プロテスタント諸教会がその扉を閉ざすに至った原因は、この図表の導入であった。この図表が5月に導入されたとき、プロテスタント諸教会は、ミラー派は惑わされた狂信者であると判断した。

次に来るのは最初の失望である。『各時代の争闘』393ページより、「1842年という早い時期に、この預言のうちに与えられている、『この幻を書きしるし、これを板の上に明らかにしるせ。これを読む者が走るためである』との指示は、チャールズ・フィッチに、ダニエル書とヨハネの黙示録の幻を図解する預言図表の作成を示唆した。」1844年10月22日の大失望の直前に死去したチャールズ・フィッチは、この歴史において主に用いられた。彼はその図表を作成し、それは1842年5月に出版された。

この図表の刊行は、ハバクク命令の成就とみなされた。しかしながら、幻の成就における一見した遅延に気づく者はだれもいなかった。同じ預言の中には、遅延の時も示されている。失望の後、この聖句は重要なものとして現れた。「この幻はなお定められた時のためである。しかし終わりにはそれは語って偽らない。たとい遅れるとも、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。義人は信仰によって生きる。」遅延の時とは、1844年3月22日に到来した最初の失望である。ミラー派は、聖書の時の数え方を用いて、1843年に世界の終わりが来ると予告していた。主がその時までに来られなかったため、1844年3月22日に最初の失望が生じた。それが遅延の時である。

これは、十人のおとめのたとえにおける、またハバクク書2章およびダニエル書12章における遅延の時である。ダニエル12:11は、「また、常供の燔祭が取り除かれ……」と述べている。先駆者たちは、クローヴィスが西ゴート人を打ち破った508年に、異教主義が抑え込まれたと理解していた。異教主義が取り除かれ、そして教皇制が据えられる時（その三十年後の538年）から、1290日がある。次の節は、「待ち望んで千三百三十五日に至る者は幸いである」と述べている。508に1335を加えると1843になる。「1843年に至る者は幸いである。」1335は遅延の時を示しており、「待ち望んで1843年に至る者は幸いである」と告げている。もしあなたが、エレン・ホワイトがそうしているように、常供についての先駆者たちの理解を支持するならば、これは明白である。

さらに明確にするために、イザヤ30:18はこう述べている。「それゆえ、主は待たれる。」ここで、主は十人のおとめのたとえにおける花婿であり、遅れておられるのである。「それゆえ、主はあなたがたに恵みを施すために花婿として遅れ、それゆえ、あなたがたをあわれむために高く上げられる。まことに、主はさばきの神である。主を待ち望むすべての者は幸いである。」これはダニエル12:12と一致する。「待ち望んで千三百三十五日に至る者は幸いである。」花婿は1844年3月22日に遅れるのである。最初の失望に至り、その後待つことには祝福が伴っている。あなたがここに来たなら、待たねばならない。何を待っているのか。ハバクク2:3はこう述べている。「この幻はなお定めのための時である。しかし終わりにはそれは語って偽らない。たとい遅れるとも、それを待て。」千三百三十五日に至る祝福とは、この歴史に至る祝福であり、そこにおいて主は真夜中の叫びを成し遂げられるのである。

だれもが真夜中の叫びに参加することを許されるわけではない。ある人々は、イエス・キリストとの自らの個人的経験や神の御言葉の個人的研究のゆえではなく、恐れから、ミラー派の人々とともに歩んだのである。真夜中の叫びが到来する前に、主はこれらの兄弟たちをこの運動から分離される。最初の失望は、真夜中の叫びのための備えの過程の一部である。エレン・ホワイトによれば、もし私たちがこのことを理解しないなら、私たちは下方の邪悪な世界へと至る道から落ちてしまう。

## 第二天使の使命の力ある宣明

『初代文集』238ページより。「第二天使の使命の終わりに近いころ、わたしは、天からの大いなる光が神の民の上に輝いているのを見た。この光の光線は太陽のように明るく見え、わたしは天使たちの声が『見よ、花婿が来る』と叫んでいるのを聞いた。」これが真夜中の叫びであり、第二天使の使命に力を与えるはずのものであった。先駆者たちは、第一天使の使命は1798年に到来したが、1840年のオスマン帝国の崩壊によって力を与えられたと理解していた。すべての使命はある時点において到来し、その後力を与えられる。第二天使の使命は、プロテスタント諸教会がミラー派の使命に対してその扉を閉ざした1844年3月22日に到来する。真夜中の叫びは第二天使の使命に力を与える。第三天使の使命は1844年10月22日に到来し、黙示録18章の力強い天使がそれに加わるとき、力を与えられる。すべての使命は歴史の中で到来し、その後力を与えられる。このことを理解することは重要である。

真夜中の叫びは、第二天使の使命に力を与えた。天使たちは、落胆した聖徒たちを奮い立たせ、彼らの前にある大いなる働きのために備えさせるため、天から遣わされた。最も才能ある人々が、この使命を最初に受けたのではなかった。ウィリアム・ミラーは、この使命を最初に受けたのではない。むしろ、彼はそれを最後に受けたのであった。彼はこの使命を理解する点において最も才能に富んでいたが、サミュエル・スノーが最初であった。かつてこの働きを指導していた者たちは、この叫びを受け入れ、その高まりを助けるに至るのが最後であった。歴史的に見て、真夜中の叫びの使命を最後に受け入れた人物は、ウィリアム・ミラーであった。

『各時代の争闘』376頁より。真夜中の叫びの力づけの期間中に、およそ五万人が諸教会を去った。ミラーの働きは諸教会を建て上げる傾向をもっていたので、当初は好意をも

って受け入れられたが、牧師たちと宗教指導者たちが再臨の教理に反対することを決定し、この主題に関するあらゆる興奮を抑えたいと望むに至ると、彼らは説教壇からこれに反対し、会員たちが再臨についての説教を聞きに行く特権、さらには交わりの集会において自らの希望について語ることも認めなかった。今日、教会内のみならず私的な家庭においてさえこのメッセージの教えを禁ずるアドベンチスト教会の指導者たちは、ここにミラー派運動のうちに予表されている。

信者たちは、自らが大きな試練と当惑の中に置かれていることを知った。彼らは自分たちの諸教会を愛しており、そこから離れることをためらっていた。だが、神の御言葉の証しが抑圧され、また預言を調べる自分たちの権利が否認されるのを見たとき、神に対する忠誠は彼らがそれに服することを禁ずると感じた。神の御言葉の証しを締め出そうとする者たちは、キリストの教会を構成するものと見なすことはできなかった。したがって、彼らは自分たちの以前のつながりから離れることは正当であると感じた。1844年の夏、およそ五万人が諸教会から離脱した。

### ミラーの理解と真の真夜中の叫び

Elder Damsteegt の著書『Foundation of Seventh-day Adventist Message and Mission』によれば、Miller は、Daniel 8:14 と Revelation 14 の第一天使の宣言は、「見よ、花婿来たる」という真夜中の叫びであると信じていた。彼は、このメッセージがキリストの再臨を指し示すものであると考えていた。Miller は全歴史そのものが真夜中の叫びであると考えたが、Ellen White は、真夜中の叫びはある特定の時点において成就したと述べている。Samuel Snow は、自らの提示を、真夜中の叫びを一般的なメッセージであるとする Millerite の教えと区別するために、「The True Midnight Cry」と題した。

最も霊的な者たちが最初にその使命を受け、かつてこの働きを指導していた者たちは、それを受け入れ、この叫びをいっそう高めることに加わるのが最後であった。1833年以来この働きを導いてきたウィリアム・ミラーは、1844年8月に真夜中の叫びの使命がもたらされたとき、それを受け入れることに苦闘した。彼は諸教会から分離することについて確信が持たず、また真夜中の叫びについて、長年にわたり別の理解を教えていた。

ウィリアム・ミラーは次のように記した。『私は、主の御出現の特定の日については、かつて一度も断定的ではなかった。というのは、だれもその日その時を知ることはできないと信じていたからである。私の公刊されたすべての講義録には、表題紙に見られるように、「1843年頃」と記してある。私の口頭によるすべての講義においても、私は常に聴衆に対し、もし私の計算に誤りがなければ、その期間は1843年に終わるのであろうと語ったが、しかし、その終わりがなおそれ以前に来ないとは言えないこと、そして彼らは絶えず備えていなければならないことを告げた。1842年には、ある兄弟たちがきわめて断定的にその正確な年を宣べ伝え、私が「もし」という語を入れることを非難した。』1842年5月、1843年の図表が出版され、兄弟たちはミラーに対して、その提示から「もし」を取り除くよう求めた。

ミラーはさらにこう続けた。『公の新聞はまた、わたしが主の再臨の日として四月二十三日という特定の日を定めた、と報じてもいた。したがって、その年の十二月に至り、わた

しの算定に何ら誤りを見いだせなかったので、主は一八四三年三月二十一日から一八四四年三月二十一日の間のいつかに来られる、とのわたしの信念を公にした。』ミラーはすでに第七の月の十日という結論に達しており、サミュエル・スノウがこの結論を用いて真夜中の叫びを宣布するはるか以前に、ミラーはそれについて書いていた。サミュエル・スノウが一八四四年十月二十二日を特定するために用いた論理を組み立てるうえで、主がお用いになったのはミラーであった。

ミラーはこう記している。『1843年の間、新聞および一部の講壇から、私と私に関係する者たちに対して、最も激しい非難が浴びせかけられた。われわれの動機は攻撃され、われわれの原則は曲解され、われわれの人格は中傷された。』時は過ぎ、1844年3月21日も、主が出現されないまま過ぎ去った。失望は大きく、多くの者はもはや彼らと共に歩まなかった。これ以前、1840年の時点では、ミラー派は推定20万人いたが、この時点では、残っていたのはわずか5万人であった。

ミラーは続けてこう述べた。「これに先立つ1843年の秋、私の同労者のうち数人が諸教会をバビロンと呼び始め、そこから出て来ることが再臨信徒の義務であると主張し始めた。私はこのことを非常に悲しんだ。その結果がきわめて悪かっただけでなく、私はそれを神の御言葉の曲解、すなわち聖書のねじ曲げであると見なしたのである。」ミラーは第二天使の使命をめぐって葛藤し、そのことが、真の真夜中の叫びの使命を受け入れることを彼にとっていっそう困難にした。この慣行は広まり、諸教会は彼らに対して閉ざされ、敵意を生じさせ、その結果、再臨信徒の大半がそれぞれの教会から分離されるに至った。

公に示した時が過ぎ去った後、ミラーはその正確な時期に関して自らの失望を認めたが、なおその信仰を保ち続けた。彼は1844年の夏の間、「第七月運動」が起こるまで西部における働きを続けた。彼はこの運動に何ら関与していなかった。ただし、18か月前に、モーセ律法の諸規定がその月を指し示していることについて書いた一通の手紙は別であった。彼は、そのような事柄がそのように用いられることになるとも、そのような証拠への信仰が救いの試金石となるとも予期していなかった。彼がこの運動と交わりを持つようになったのは、1844年10月22日の二、三週間前になってからであった。1844年10月6日付のハイムズ宛ての手紙の中で、ミラーは次のように記している。『私は第七月のうちに、これまで一度も見たことのなかった栄光を見ます……今や、主の御名がほむべきかな、私は聖書の中に、私が長い間祈り求めてきたが今日に至るまで見ることのなかった、美しさと調和と一致とを見ます。わが魂よ、主に感謝せよ。スノー兄弟、ストーズ兄弟、そして他の人々よ、私の目を開く器として用いられたことのゆえに、祝福されよ。私はもうすぐ帰郷です。栄光、栄光、栄光、栄光。』

その後、ミラーは真夜中の叫びを狂信とみなして再考した。ダムスティーグトは、スノーが真夜中の叫びのメッセージの基本的な構想を、ミラーの以前の著作から得たと指摘している。

1844年3月に公表されたスノーの計算は、1844年8月12日—17日のエクセター・キャンプ集会まではほとんど注目を集めなかった。そこで、キリスト再臨のための彼の正確な日付は多くのミラー派信徒を奮い立たせ、彼らの宣教活動を最高潮にまで高めた。彼らのこの応答は、第七月運動として知られるようになった。ミラー派の指導者たちは当初懐疑的で

あったが、予期された出来事の数週間前にはこの運動に加わり、スノーの見解が印刷され支持されることを許した。

## 真夜中の叫びとその余波

エレン・ホワイトの最初の幻は、天へと至る道を歩む神の民を示しており、その彼らの後方には「真夜中の叫び」と呼ばれる光があった。サミュエル・スノーが提示した使命は理解される必要がある。1842年5月、300人の説教者のために300枚の図表が印刷された。1844年3月22日、最初の失望の後、その図表は退けられ、多くの者がこの運動を去った。残った者たちは待つべきであった。エクセターのキャンプ集会において、スノーは、主が1844年10月22日、すなわち贖罪日に来られることを示した。これが彼らをしてその使命を宣布させた。

ジョセフ・ベイツは、エクセターのキャンプ集会の後、列車の車両の中を歩いていると、「見よ、花婿が来る！」と繰り返す声を耳にしたことを回想している。この運動は二か月のうちに合衆国全土を席卷し、1844年10月22日の大失望へと至った。

ダムステークトは、1844年12月28日—29日に開かれた、ハイムズとミラーが関与したアドヴェンチストのロー・ハンプトン会議について論評している。ハイムズは、聖徒たちを慰め、キリスト教世界を奮い立たせ、罪人たちに救いを宣べ伝えるよう促した。その数週間後、アドヴェント・プレスは再開され、ハイムズは救いの門が開かれていると宣言した。ミラーは、極端な閉ざされた戸の概念をしだいに捨て去り、真夜中の叫びに関する彼本来の見解へと立ち返った。まさにその同じ月に、エレン・ホワイトは最初の幻を与えられ、真夜中の叫びを拒む者たちがその道から落ちることを示された。その幻は、だれにもましてウィリアム・ミラーのためのものであった。

## ウィリアム・ミラーの最後の試練と遺産

『初代文集』257頁より。「そのとき、わたしの注意はウィリアム・ミラーに向けられた。彼は困惑した様子で、自分の民のことで不安と苦悩にうちひしがれていた。1844年に一致し、愛し合っていた一団は、その愛を失いつつあり、互いに反対し合い、冷たく、背信した状態へと陥っていた。彼がこれを見ているうちに、悲しみがその力を衰えさせた。わたしは、指導的立場にある人々が彼を見守り、とりわけジョシュア・ハイムズが、彼が第三天使の使命を受け入れるのではないかと恐れているのを見た。」この文脈における第三天使の使命とは、安息日である。ミラーが天からの光のほうへ傾こうとすると、これらの人々は彼の心をそこから引き離すための策をめぐらした。人間的な影響力が彼を暗闇の中にとどめ、真理に反対する者たちの間における彼の影響力を保たせた。ついにミラーは、天からの光、すなわち安息日に反対して声を上げた。彼は、自らの失望を説明し、過去に光と栄光を投げかけるはずであったその使命を受け入れることができなかった。彼は神的なものではなく、人間の知恵に寄り頼んだ。労苦と老齢によって衰え果てていた彼は、彼を真理から引き離した者たちほどには責任を負わされない。罪は彼らの上にある。もしミラーが第三天使の光を見ることができていたなら、多くのことが説明されたであろう。しかし彼の兄弟たちは、彼に対して非常に深い愛を抱いていると公言していたので、彼は自分が決して彼らから離れ去ることはできないと思った。神は、彼が死の力の下に倒れ

ることをお許しになり、彼を真理から引き離れた者たちから彼を隠すために、墓の中に彼を覆い隠された。モーセは約束の地に入る前に過ちを犯した。同様に、ミラーもまた、まもなく天のカナンに入ろうとしていたときに過ちを犯したのである。他の者たちが彼をこのことへと導いたのであり、その責任は他の者たちが負わなければならない。しかし天使たちは、この神のしもべの尊いちりを見守っており、終わりのラッパの響きとともによみがえるであろう。

### 結論：今日への教訓

結論として、ウィリアム・ミラーは世の終わりにおけるセブンスデー・アドベンチストを予表している。エレン・ホワイトの最初の幻は、彼女自身の時代のためというよりも、むしろ私たちの時代のためのものである。世の終わりにおいて、セブンスデー・アドベンチストは真夜中の叫びの光を拒むであろう。真夜中の叫びの光は、この歴史を理解することによってのみ理解され得る。最初の失望は、誤った理由でそこにいた者たちをミラー派運動からふるい分け、彼らを至聖所へと導く試みの経験に備えて民を整えた。最初の失望に至る者たちが祝福されるのは、ただ1844年10月22日を待ち望む場合に限られる。この時は、神が御自分の民を至聖所へ集め入れるための民を生み出すよう定められたものである。真夜中の叫びを拒み、その道から落ちることは、この全歴史を拒むことである。

ウィリアム・ミラーは三つの誤りを犯した。そして、私たちは常に三つの試みによって試される。彼の第一の誤りは、1844年12月に真夜中の叫びを退けたことであった。彼の第二の誤りは、神ではなく人の言葉に耳を傾けたことであり、それが彼の第三の誤り、すなわち安息日を退けることへと導いた。世界の終わりにおいて、セブンスデー・アドベンチストは、自らの指導者たちの声に従うがゆえに、真夜中の叫びの歴史と古い道に立ち返れという召しとを退けるであろう。そのようにして彼らは、獣の刻印を受ける備えをしつつ、ミラーの三段階の試験の過程を反復するのであり、その過程は、彼らが真夜中の叫びの使命と歴史にいかに関わるかということから始まる。

最初の失望から第二の失望に至るまでの歴史を扱う預言は、ただ二つしかない。すなわち、2300日（「たといその幻がおそくなくても、それを待て」）と2520である。2520を拒むことは、真夜中の叫びを拒むことである。真夜中の叫びを拒むことは、下の邪悪な世界へと至る道から落ちることである。

この点については、次の発表でさらに取り上げることにします。